

同人誌「胎動」より転載

廣大人 あらため

平成十六年十月大幅加筆修正版

## 横濱 - JAZZ Age - 抄

たなか 踏基

踏基のHPに掲載し「愛顧の二作品は「横濱-JAZZ Age」「奇妙な喫茶店」と改められ、この度(株)文芸社より帯と装丁も新たなハードカバーに変身し、タイトル「奇妙な喫茶店」で、全国配本上梓の運びとなりました。此処に皆様にご報告して感謝申し上げます。今後はどうぞ、ぜひとも(株)文芸社より発売の書籍を書店にてお買い求め下さい。第八回、直木賞作家の大池唯雄を父に(本名小池忠雄)、NHK歌壇選者として(これまた活躍中の、現代短歌界の重鎮小池光氏より、縁あって巻頭の序文戴きました。誠に身に余る光栄と感謝申し上げます。初版本「奇妙な喫茶店」は、特に未永くご愛顧戴ける一冊となるかと存知ます。「横濱-JAZZ Age」あらずじとさわりをピックアップにて、紹介致しますので「笑読下さい。

## あらずじと解説

これは、私が濱で出逢った元横濱・本牧の不良、森村慎次郎の青春の彷徨と旅立ち

を描いた作品だ。

アルコール依存症の父、彼に共依存する母を持ち、信州・松本に慎次郎

ホステスやバーテンは、クラブ「葵苑」に慎次郎が始めて現れた日から、非行少年上がりの翳あるジャズマンに、一様に興味を抱いた。育った境遇の同類者だけが持つ嗅覚で、敏感にやさぐれの匂いを感じとつたからである。ある晩チーフ・バーテンが、喧嘩を売ってきた。腕前を試すような嫌がらせに敢然と反発し、激しく満ちてくる闘争心を面にだして慎次郎は受けて立った。

「おいジロウ 演歌をやってみろ！」

「俺は、JAZZをやるために来た。」

「ここを何処だと思つてやがるんだ！ザキ

だぜ ザキ！ 船の兄ちゃんの本牧モク

モクの(Toyon)と客種が違つんだ！」

《よし みとれ！ 俺の演歌はこれだ！》

慎次郎は、ピアノの富安に目配せすると

アルトサクスの唄口を二、三度湿らせた。

それは Come around Again(めぐりきぬ)

と言う新しいアレنج曲をやるぞという無

言の合図であった。父から口伝で覚えた幼

児期の寂しい子守唄、膝の上で抱かれた時

の印象がバード風に編曲されていた。

前奏なしでいきなり、ピアノが奏でる短

調の旋律がフロアに流れ始めた。六小節目

で季のベースが、十二小節目で五十嵐がブ

ラシングでリズムに入る。そうだ！最初の

1コーラス目は押えて弾け。イイゾ 富安！

そのまま二十四小節全部いけ。無口なべー

は生まれた。若き日に家庭の事情で音楽家の夢断たれた父は、その膝に慎次郎を乗せながら、時に涙して「廻り来ぬ」を歌っていた。聴く者の心に深く染み入るその哀調が全編を通して漂う本作の背景だ。八才の時に両親が離婚、慎次郎は十三才で横浜の親戚の家に引き取られたものの、やがてその家も飛び出し、本牧で不良少年グループを率いて非行の限りを尽くす。グループの溜まり場である「Toyon(霧笛)」で耳にしたアルトサクスの退廃的な音色に惹かれ、慎次郎はバンドを結成する。ここから描かれる慎次郎の若き心の咆哮は圧巻だ。高級クラブ「葵苑」で、裏の世界に生きるバーテンやホステスの老獪さに全身でぶつかっていく彼の姿には、暴力的でありながらどこか純粹な少年の内面の危うさや一途さが滲む。そして、その丁寧かつ力強い筆致こそが、慎次郎が過去と決別し青年事業家として旅発つラストシーンの深いカタルシスを導き出したのだ。(文芸社編集部)

x x

スト、控え目なスネアが刻み続ける。

よしいくぞ！ソロが慎次郎のアルトに渡ると、2コーラス目の途中から、遠慮がちに絃志のペットが三度下のミュートで八モリ出す。サビから松チャンのギターがピックして、五十嵐がリムショットに変えてフロントを支える。3コーラス目には、ペット、アルト、十二小節毎のアドリブ。交代のタイミングを、バスドラが教えている。

さあ、こい！目で合図して、絃志にソロを渡す。3連譜のピアノとギターが付く。一段と厚みを増した音の流れが、重なりながら「葵苑」のフロアを次第に圧倒していく。さあどうだ！もうこつちのものだ。合図してリズムレスに変える。二十四小節のピアノソロで最初の静けさに戻る。慎次郎はアルトを小脇に抱え、ハンドマイクを握るとおもむろに父の子守唄を歌いだした。

《一、めぐり来ぬ 今年の秋の記念祭、  
悲しみ多き若き日のうれいひを友と分かつべく この丘の上のうちつどい命の詩(うた)を唄わばや・・・命の詩(うた)を唄わばや・・・》

《二、逝きにし、三とせの夢をしのびつつ、夕べの丘に迷う時、茜色なす星屑は、われらの上にまたたきて、遠き想いをかたるかな・・・遠き想いをかたるかな・・・》

慎次郎は、ピアノをバックに二番まで唄う。最後は、アルト、ペットの合奏にリズムを全部揃えて、厚く膨らむ演奏を締めくくった。ライトの向こうの反応を測る。しまった！唄は失敗だ、でしゃばり過ぎた。

一瞬！静まりかえっていたフロアが、突然爆発した。一人の中年外人女性客が、いきなりステージに駆け上ると、慎次郎に抱きつきメンバー一人一人に握手を求めにきたからだ。つられて連れの外人男性客も、ステージが上がってくる。何か言っているが良く聴き取れない。涙目になっている者がいる。おそらく「何という曲か？」を聞いたのだと思う。いったん客が退いたのを見計らって、ステージで一礼すると、手を上げて他のメンバーにも答礼を促し、再度慎次郎は深々と客の拍手に応えながら、コメントを付け加えて挨拶した。

「この曲は、父の子守唄をバラード風に新しくアレンジしたものです。父は幼い私を抱きながら、時に涙して膝の上で、時に散歩で肩車すると、決まってこの詩(うた)を私に唄って聞かせてくれました。」

また客がどっと沸いた。  
外人客が立ち上がって連呼している。  
「・・・ルーラバイ・・・ルーラバイ・・・」  
ソファアのホステスもカウンターのバーテンも、ステージを見上げて、慎次郎の演

奏に一斉に笑顔で賞賛の拍手を送った。

「葵苑」が「ジロウ&ビッグ5」を、クラブの正式メンバーとして認知した瞬間であり、慎次郎の最も晴れがましい瞬間だった。 Come around Again(めぐり来ぬ)

は、この時から「葵苑」の曲となり、以後チーフ・バーテンは演歌を要求しなかった。  
x x

・慎次郎は少年の日の始めての夢精に、潔癖で高慢な少女が初潮の時にみせた興奮したまごつきを覚えていた。夢精の度に、自分の肉体の何処かに深い痛みがあつて・・・、本人も気付かなかつたが、それは幼児期のアルコール中毒の父に対する嫌悪感と何処かで繋がっていた。その嫌悪感を、誰かに暴かれて弄り回されているような不快感、夢の中に突然飛び出してくる精液の噴出で汚れたパンツを洗う自分がとても惨めに思えたからだ。

ひたすら慎次郎は冷徹な偽悪者であり続けた。船員が残していった、下卑た外国雑誌の女の裸目掛けて、練習後のバンド仲間と自慰の快楽に身を任せ、「foghorn(霧笛)」で亀頭の放列を揃え精液の一斉射撃をした。

《口開けて翔ぶ冬鷗異国船/踏碇》

了